

第 13 講 思考力を高めるための学習プロセスの 反応分析

【学習到達目標】

- ・レスポンスアナライザについて説明できる。
- ・レスポンスアナライザの教育利用について具体例を示して説明できる。
- ・集団反応曲線と集団の特性との関係について説明できる。

1. レスponsスアナライザについて

サイバー空間と現実空間が高次に融合する“Society5.0 時代”的到来を前提に構想された GIGA スクールは、「1人1台端末」の導入と学校での高速通信ネットワーク構築をはじめとしたハード面の整備が、新型コロナウイルス感染症拡大を受け、その動きを加速している。

しかし、教育現場の変化が加速している中、教育ビッグデータ等の教育情報の利活用やデジタル教科書などソフト面の整備についてまだ十分ではない点が見られる。

また、新学習指導要領が目指す育成すべき資質・能力を育むためには、学びの量とともに、質や深まりが重要であり、子供たちが「どのように学ぶのか」つまりは、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」が問われているが、主体的・協働的な学びが重要視されている中で、その評価についてはまだ研究が十分になされていない。ここでは、これらの主体的・協働的な学びにおける授業アーカイブとレスポンスアナライザの連携システムによる評価方法について考える。

2. GIGA スクール構想

GIGA スクール構想により、児童生徒一人一台の環境が整ってきた。もともと、ICT 環境の整備は、児童生徒の学習の手助けとなるツールとして、またコロナ禍におけるオンライン授業の推進を主目的として推し進められてきた。本学で

は、2000年代からこのような環境になることを想定し、児童生徒の学習過程における思考力を高めるための教師の発問に対する学習者の反応時間を記録、分析し、授業分析を教師誰もが容易に行えるシステムの開発研究を進めてきた。

学習ツールとしてだけでなく、「児童生徒の学習成果を瞬時に把握し、評価しながら、教師自身の授業評価をも把握できるシステムは、児童生徒の学習向上にもつながる。

そこで、過去のアナライザによる授業分析の研究を参考にしながら、発問パターンによる応答分析結果とその比較考察を行い、集団の特性の違いによってどのような集団反応曲線の違いがあるかを検証した。

3. レスponsスアナライザと授業改善

1970年代には後藤忠彦氏（前岐阜女子大学学長・教授）を中心とした研究グループにおいて、レスponsスアナライザによる授業分析において、先生の発問、問題、児童・生徒の話し合い、実験・実習などでアナライザのスイッチを自由に押させ、学習者の反応を集めてテープレコーダ等に記録していた。このデータを授業後にPenレコーダに記録させ、記録紙の上に教師、児童・生徒の言語活動を文字で記入した。授業での教師、児童・生徒の言語活動と反応、さらに静止画の映像から授業の様子を分析し、授業展開の中での教師の探査的な発問を中心に児童個人・グループ・全体が応答する目安の時間としてまとめ、図13-1のように集団反応曲線のモデル化としてまとめてきた。

ここでは、それを発展させ、児童生徒1人1台のタブレットPC環境の中、授業終了後でしかできなかった反応分析をリアルタイムで教師が把握できることをめざすとともに、発問・質問の類型化を図り、その種類によってどのようなパターンになるのか。また、どのような発問が思考を深めるのか、理想的な主体的・協働的な学びの一助になるよう1970年代に培った事例を参考に研究を深めた。

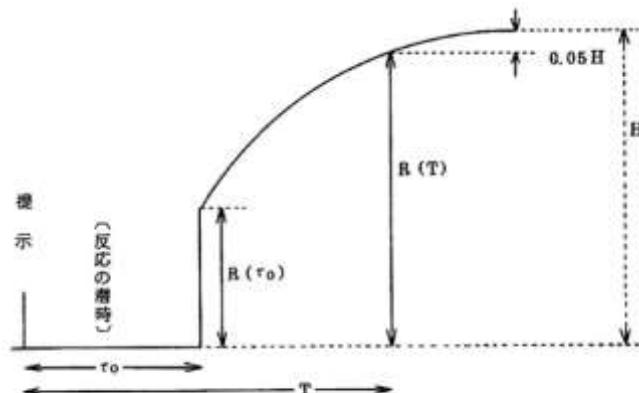


図13-1 集団反応曲線のモデル化

4. 授業における評価と分析方法

児童生徒が自分の発問をどれくらい理解しているかは、教師が児童生徒について知るべき最も重要な情報のひとつである。授業を通じて常に児童生徒の理解度をチェックすることができるのがレスポンスアナライザである。このレスポンスアナライザは、単に理解度をチェックするだけではなく、理解度の時系列の変化も見ることができ、ひとつのティーチング・ポートフォリオという機能があると考える。

このティーチング・ポートフォリオは、近年アメリカの大学で教師の教育活動の評価のために用いられるようになった方法である。教師は、自分の教育活動の成果と質を証拠立てる資料をそろえ、それをひとつのファイルにまとめて、教育業績の評価を受けるというものである。もともとはこのように教師の教育における能力を評価し査定するために作られるものであるが、これを自分の授業改善のための資料、つまり拡張された授業記録としての役割に転用することができる。

ポートフォリオのよい点は、さもなければ散逸してしまう教育活動についての資料やデータをひとつにまとめるという点にある。残念ながら多くの教師にとって、授業はやりっ放しというケースが多い。しかし、毎回の授業が終わるごとに、教科書の不出来な部分、児童生徒がつまずいたポイント、うまくいったたとえ話、特徴的な質問などを記録し、ポートフォリオに保存しておくことは重要である。こうした記録を、授業中に配ったハンドアウト、児童生徒の最終的な成績結果などとともにファイルしておくことが、次年度の授業を設計するときにも役立つ。

5. 集団の特性と集団反応曲線

発問してから集団全体の95%が反応するまでのいわゆる集団反応曲線には、様々な特徴が見られた。

例えば1960年代における学級内の学力の分布は、図13-2に示すように概ね正規分布に近い形

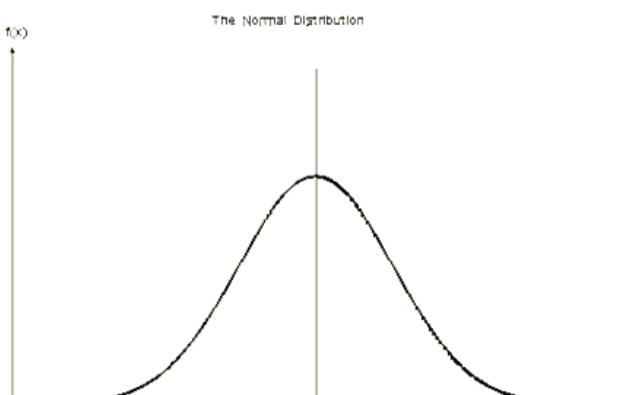


図13-2 学力の正規分布曲線

で分布しており、その当時の集団反応曲線が図13-3のように記述されていた。

しかし、現在では、図 13-4 のように学力の二極化が進んでおり、高知大学の藤田（2011）の「学力の二極化モデル～全国学力・学習状況調査を中心として～」の論文では、「学力の二極化は、子供たちの属する社会的・文化的・経済的階層が 2 つあり、その 2 つの分布が重なり合っている状態」と論述している。

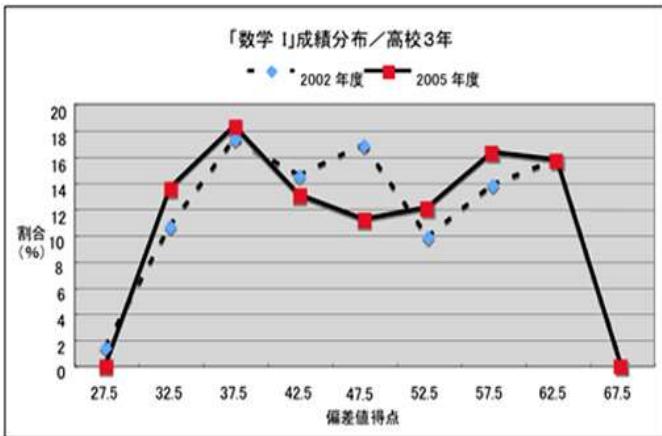


図 13-4 二極化した学力分布

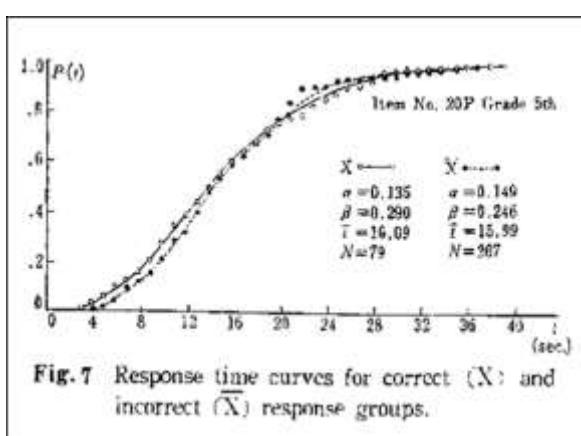


図 13-3 集団反応曲線



学力の二極化
モデル～全国
学力・学習状
況調査を中心
として～

このような二極化モデルの集団であると、その集団反応曲線は、図 5 のように推測できる。そこで、学力分布について集団反応曲線の差異を発問の違いから明らかにし、その違いを授業改善にどのように生かすかについて考察する。

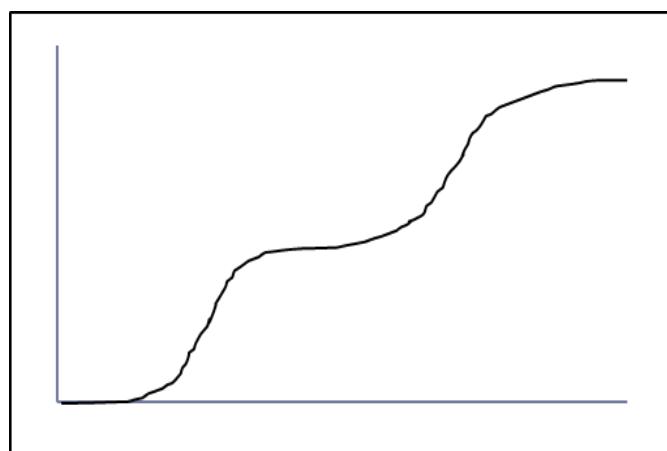


図 13-5 予想される集団反応曲線

6. 発問のカテゴリー

発問と集団反応曲線について
では、図 13-6 の Mc-Gill 仮説
のような学習プロセスを経
て、児童生徒が反応するとみ
られ、集団反応曲線は、図
13-3 の集団反応曲線のモデル
化のような曲線になると予想
されている。

その結果、1970 年代の後藤
忠彦氏（前岐阜女子大学学長）を中心とした研究グループのレスポンスアナライ
ザによる授業分析では、授業展開の中での教師の探査的な発問を中心に児童個
人・グループ・全体が応答する目安の時間として、表 13-1 のようにまとめられ
てきた。

表 13-1 発問と応答の反応時間

	Q ₁	Q ₂	Q ₃
小学校	10秒	14秒	20秒
高校	10秒	14秒	23秒



図 13-6 Mc-Gill 仮説



「発問と応答」
を考える

* Q は発問から
反応するまでの
時間の 4 分位
Q1 (1/4)
Q2 (2/4)
Q3 (3/4)

(1)ブルームのタキソノミー

教育における発問は、学習者の
思考・認識過程を経るものであ
り、学習者の既存知識や学習内容
の理解度を測ったり、意見を活用
したりすることで授業をより深い
学びに導く。

ベンジャミン・ブルーム
(1956) が“Taxonomy of
educational objectives”的なかで

提唱した表 13-2 の「教育目標のタキソノミー（分類学）」は、低次の認知的発
問から高次の認知的発問へと目標の能力面を階層的に整理したものである。

表 13-2 ブルームの教育目標のタキソノミー

評価 Evaluation	個性化 Characterization	自然化 Naturalization
統合 Synthesis	個性化 Characterization	自然化 Naturalization
分析 Analysis	組織化 Organization	分類化 Articulation
適用 Application	価値づけ Valuing	精密化 Precision
理解 Comprehension	反応 Responding	巧妙化 Manipulation
知識 Knowledge	受け入れ Receiving	模倣 Imitation
認知的領域		情意的領域
		心的運動的領域

このブルームのタキソノミーを、弟子のアンダーソンが改訂タキソノミーとして図 13-7 のように提唱している。

(2) 発問のカテゴリー

アンダーソンが提唱している改訂タキソノミーを元に発問を図 13-8 のようにカテゴリー化した。これを関ヶ原の戦いに置き換えると、表 13-3 のようになる。



図 13-7 アンダーソンによる改訂タキソノミー

i) 低次の認知的質問	A 想起的質問 (記憶)	学習者に、すでに見たり聞いたりしたことを想起させるための質問。 認識、想起、識別、描写、名づけ、レッテル、認知、再生、真似
	B 理解力に関する質問 (理解)	学習者が想起したことを理解しているかを調べる質問 解説、例証、分類、要約、推測、比較、説明
	C 適応力に関する質問 (応用)	単純な正答をもつような問題解決に想起した知識や技術が適用できるかを調べる質問 構築、作成、構成、模型、予想、準備
ii) 高次の認知的質問	D 分析的質問 (分析)	学習者に、ある事象の動機や原因を確認させたり、あるいは、演繹や帰納をすることを求めたりする質問 比較・対照、分解、区別、選択、分類、整理、原因究明
	E 評価的質問 (評価)	学習者に問題点にかんする意見を求めたり、価値判断させたりする質問 査定、批評、判断、証明、議論、支持、確認
	F 創造的質問 (創造)	学習者に「考えを生み出し」「計画を作り」「成果物を作り上げ」課題達成のために新たに創造活動をさせる質問 発案、計画、生産、類別、法則化、再構築

図 13-8 発問のカテゴリー

表 13-3 具体的な発問例(関ヶ原の戦いの例)

- ①関ヶ原の戦いはいつ起こったのか。【認知】
- ②関ヶ原の戦いの概要を説明しなさい。【説明】
- ③関ヶ原の戦いで石田三成が勝つためには何をすればよかったです。【予想】
- ④関ヶ原の戦いの原因は何だったか。【原因究明】
- ⑤関ヶ原の戦いによって徳川家康は、どのような社会を作ろうとしたのか。【批評】
- ⑥関ヶ原の経験を踏まえ、戦のない世の中を構築するためにどのような方策が考えられるか。【発案】

今回の実証実験では、このカテゴリー別の発問により集団反応曲線がどのようになるかを分析した。

(a) 発問カテゴリー (A) の集団反応曲線

カテゴリー (A) は、「記憶」「想起」がキーワードで、長期的記憶の中から関連する情報を「認識」または「想起」すること。記憶から正しい情報を呼び出す発問である。

検証数：二極化緩い 35 人 二極化顕著 36 人

発問 1：細胞という言葉を知っていますか？

単純な Yes か No で答える問い合わせに対して、学力の二極化が緩いすなわち正規分布に近い学級集団の結果は、図 13-9 のように Q1(25%) : 2 秒、Q2(50%) : 8 秒、Q3(75%) : 23 秒の応答時間であった。

これに図 13-10 に示すように二極化が顕著と思われる学級集団では、Q1(25%) : 19 秒、Q2(50%) : 27 秒、Q3(75%) : 48 秒の応答時間であった。初動 (τ_0) に時間が要すること、その後の集団の反応は同じように上がるものの、終息では、時間をかけても反応できない生徒が多いことがわかる。

この実践は、認識や経験の差がこの発問には影響が大きい。授業の最初に発問されることが多いが、単元のはじめにおいてレディネステストなどで実態を把握し、さらなる思考の妨げとならないよう配慮して行った。

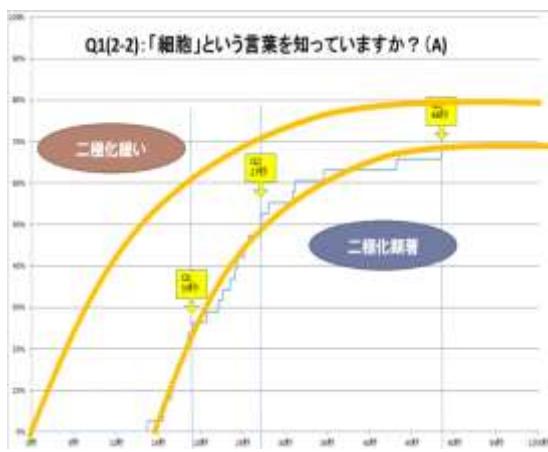


図 13-9 カテゴリー(A)発問の集団反応曲線 2

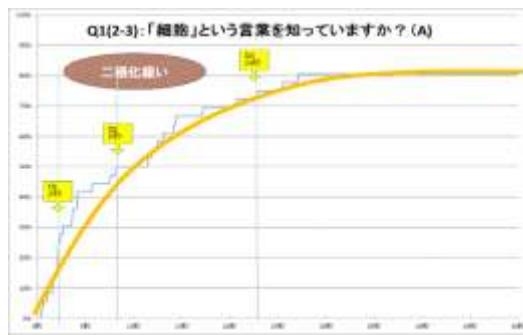


図 13-10 カテゴリー(A)発問の集団反応曲線

(b) 発問カテゴリー (B) の集団反応曲線の例

カテゴリー (B) は、「理解力」がキーワードで、与えられた客観的な知識・情報の内容や論理の展開を把握して、必要に応じて知識を活用できるようにする。教材や経験から意味をとらえさせようとする発問である。実際の授業の中で、従来の知識を理解しているかどうかを問う最も多い発問である。

発問 2 : 細胞の形や大きさに違 いはあるか？

集団の 40% が 11 秒で反応できるが、残りは理解できていないため時間を経過しても反応できない。小集団での教え合いにより、80% の理解率まで引き上げることができた。(図 13-11)

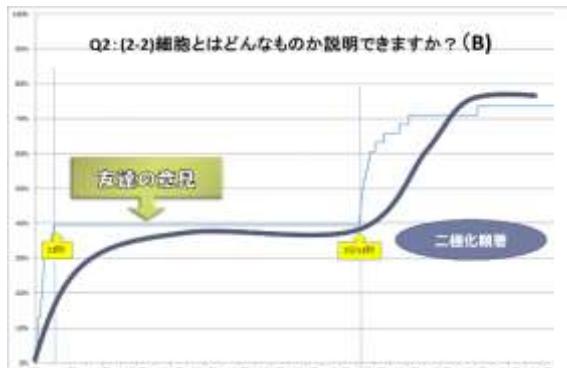


図 13-11 カテゴリー(B)発問の集団反応曲線

(c) 発問カテゴリー (C) の集団反応曲線の例

カテゴリー (C) は、「応用力」がキーワードで、学習した基本的な知識・理論・情報を活用して、直面した新たな課題や問題を解決できるように図る発問である。

発問 3 : デンプンは口の中でどうなるか知っていますか？

はじめ 20 秒ほどで 40% まで達するがその後伸び悩んだため 1 分 40 秒後話し合いをしたところ、勘違いの答えにもかかわらず曲線はゆるやかに上昇していき正答に近い意見が出たところで 85% に達した。時間にして 5 分近くを費やしたが、全体への定着率は高いものと予想される。(図 13-12)

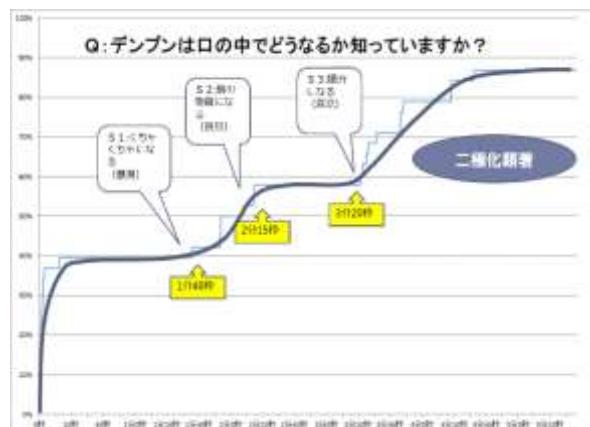


図 13-12 カテゴリー(C)発問の集団反応曲線

発問4：デンプンが糖に変わることを科学的に調べる方法がわかるか？

カテゴリー(D)分析力も必要とする発問であるためか反応率は低く、図13-13のように話し合いによっても50%程度にしか達しなかった。その後、教師の解説を入れると一気に90%まで到達した。これは、回答に未知の薬品名が必要なため情報量の不足が原因と考えられる。このような発問を行う場合は、情報量を補いながら深い学びへと導く必要があることを示す。

学習の記録をデジタルで記録することによって児童生徒自らが振り返り学習に活用する学習支援のための教育情報や、個別最適な学習指導・生徒指導を実現する指導改善。そして、大量の蓄積された教育情報を大学等で分析することによって教授法や学習法などの新たな知見を創出するなど、“新しい学び”を実現していくためには「教育情報の利活用」がキーワードとなる。

また、新たな教育の技術革新により、学習指導要領のコード化がされ、学習履歴をデジタルで蓄積できる環境が整う。その結果として、過去の教育実践記録等の教育情報を学習指導要領のコードと関連付けて利活用することも重要であり、デジタル教科書やデジタル教材、デジタルアーカイブのコンテンツに学習指導要領コードを付与することで、関連資料を一覧で表示することもできる。

これらの集団反応曲線の研究成果は、カテゴリーの違いだけでなく、集団の特性の違いにおける集団反応曲線のパターンが大きく異なることが分かる。このように、思考のプロセスの違いこそが、深い学びを生むか否かの違いにつながると考えられる。つまり、発問カテゴリーの違いにより“受け止め”，“考える”，“決定行動”に時間差が生じ、そこに個人差が生じ、集団反応曲線に違いが出てくることになる。教師は、発問の要素を十分理解し、集団の特性を考慮しながら反応曲線を予測し、ヒントや話し合いの指示を適時にすることが求められ、個別最適化で効果的に学びを支援し、深い学びにつながる授業改善に必要なことである。

このシステムによる思考力を高めるための学習プロセスの反応分析は、対面授業でもオンライン授業でも教師の瞬時の判断による働きかけが可能となり、児童生徒の思考力向上に大いに寄与するものと考えられる。

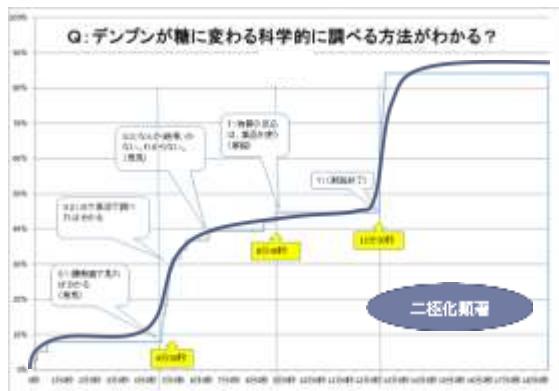


図13-13 カテゴリー(C)発問の集団反応曲線

特に、オンライン授業では、発問後の児童生徒の反応は、対面授業に比べ遠隔の特性から捉えにくい。その点、GIGAスクールの実現により、オンライン上で同時に思考過程が収集できれば教師の教授方法に変化をもたらせられるものと期待できる。

【参考文献】

- (1) 堀信哉、齋藤陽子、久世均：GIGAスクール構造による思考力を高めるための学習プロセスの反応分析、岐阜女子大学、デジタルアーカイブ研究報告、2020、Vol.3、PP31-37
- (2) 後藤忠彦編著「初任教員3年間の教育実践活動」岐阜女子大学カリキュラム開発研究所（2016/2）
- (3) 後藤忠彦監修「コンピュータを利用した教育革新」（1986/7）

課題

1. レスポンスアナライザについてその効果と可能性について説明しなさい。
2. レスポンスアナライザの教育利用について、具体例を挙げて説明しなさい。
3. 集団反応曲線と発問・応答の関係について具体例を挙げて説明しなさい。
4. 集団反応曲線と集団の特性の関係について説明しなさい。